編集後記にかえて

高木茂登

この一年の間に世界情勢は大きく転回した。東側と呼ばれた国々の民主的な内部変革によって、急テンポに対立の構造が溶解し、長い緊張が過去のものとなりつつある。半世紀もの間、人類を呪縛し続けてきたものは一体何だったか。人類の幸福のために生まれた宗教やイデオロギーが悪とはいえない。おそらく、人間を分断し、不信に陥れるものは個々の人間性を圧殺する非人間的な力の支配であることを最近の出来事は教えている。

東アジアには、まだ不安定な要素が残り、繁栄の中の日本とて底辺の現実を見れば、決して問題がない訳ではない。しかし、問題の構造が明らかになり、解決の糸口が見え始め、世界が有機的につながりながら変動を開始したのだという感触がある。

こうした普遍的な人間性へのいわば連帯感は、単にポリティカルな問題にとどまらず、文化・芸術・学問にも当然、波及するはずである。国際的な文化交流が更に活発化し、グローバルな視点による研究の飛躍的な進展が促され得ることは想像に難くない。不透明感を増していた芸術の世界にも必ずや新しい動きが出てこよう。

広島芸術学研究会も誕生してはや三年が経過、会員数百二十余名と増え、年間報告にもあるように活動も充実の度を加えている。秋には広島で美学会全国大会も開催される。芸術研究の「アゴラ」たる（金田代表）本会への一層の期待が寄せられよう。

ここに、年報（藝術研究）第三号を刊行します。美術・スポーツ美学・音楽と多分野にわたる四氏の論文は例会での研究発表を中心とする成果を踏まえたものです。会員諸氏の感想や意見、投稿を期待しています。

（たかぎ・しげのり　比治山女子短期大学）

本号掲載論文中、野村、樋口、伴谷、三氏の論文は、本研究会大会に於ける口頭発表に基づくものである。

編集委員

青木　孝夫・大井　健地・大橋　啓一
香川不苦三・金田　晉・倉橋　清方
圀府寺　司・斎藤　稔・幣原　映智
高木　茂登・八田　典子・水田　一征
南嶌　宏

藝術研究　第三号　　頒価一五〇〇円

平成二年七月二十一日　印刷
平成二年七月二十二日　発行

編集　広島芸術学研究会年報編集委員会
発行　広島芸術学研究会
〒730　広島市中区東千田町一―一―八九
広島大学総合科学部比較文化研究室気付
TEL　〇八二―二四一―一二二一
（内線三六一九or二四七七）

印刷　カシムラ社
〒730　広島市中区国泰寺町二―五―二七
TEL　〇八二―二四六―八〇〇〇